ポスト現象学としての人工物プログラム科学論は可能か

－　生活世界のプログラム構造論から　－

金蘭短期大学　三石博行

はじめに

吉田民人の人工物プログラム科学論を展開するためには、存在論の復権が必要であると言われている。その提案は、現象学が批判した実在論の復活を意味するのではないかと危惧する傾向に出会うのである。そこで、もう一度、現象学が果たした現代科学技術への影響と理解し、そして、現代科学技術が情報科学や工学の進歩によって科学技術文明の最終段階を作り上げようとしている現在の課題、つまり、科学技術文明での知の社会学の方法論として現象学のあり方を検討すする。生活世界を構成するすべてを生活資源と考え、その構成分析を進める中で、プログラムの意味を考えた。資源とよばれる世界の持つ、記号や意図を、プログラムの概念に入れながら、これまでの科学主義への批判を前提にした、また古い実在論に流れ込まない、プログラム科学の科学性を考えた。そこには、明らかに、現象学からの脱却の意図が隠されていると理解するのである。しかし、その脱却のシナリオはまだ準備されてはいない。

現代科学技術文明批判としての現象学的視点

反省学としての哲学の時代や文化的な背景

- 方法的懐疑を通じて「疑う自己を疑うことはできない」という明証性を確認する作業からデカルトは出発した。
- 疑う自己の存在を疑うことは出来ないという論理的な帰結から、疑いつつある自己から自己の存在の明証性は説明できると考えた。デカルト的な明証性は、主観的な世界で成り立つ、つまり自己意識として成立している。自己の存在を疑うことによって成立した自己の存在証明は、言語ゲーム的な行為であると解釈できる。自己を規定している疑う自己という言語がある。自己の明証性を確認するために用意されたものは、疑う自分が疑っているという行為の最中において疑うことによって生み出されたトトロジーなのである。そのトトロジーは疑う行為が続く限り存在することになるため、その限り、その自己は存在していると言えると帰結したのであった。
- こんなにまじめにことば遊びのような、方法的懐疑をしてまでも、明証的な意識と幻想的な意識を分離したかったデカルトの時代の精神状態を歴史的に理解しなければならない。対象と自己、自己意識と世界認識の融合状態、素朴実在論的な世界では、言語的行為は現実的行為と同義的な世界となり、現実にあること、存在していることと、欲すること、そう思うことが混乱した世界をなしていた。素朴実在論的な固定概念、在るものと在ろうとするものを分別することの出来ない中世世界の認識地平に、魔女狩りという暴力が許された。その解決を最も真剣に考えたモンテーニュの精神が受け継がれていた

と考えられる。

- 反省的な自己意識をもって自己が与えられている（自己が存在する）ことが、明晰判明な存在証明の第一公理となる。しかし、逆に、そう語らなければならなかったデカルトの時代とその時代文化の課題や病理的な構造から、デカルトを理解しなければならないのではないか。
- 哲学が宇宙論的な自然論的な存在論として始まった古代から、精神についての素朴な自然主義的解釈はあった。その解釈を哲学として語ることを厳しく批判したソクラテスのように、近代合理主義も、デカルトのコギト、ベーコンのイドラとして、哲学を反省学として位置づけるのである。
- 中世の社会的生産制度や技術の進歩を支えた理念や観念形態はキリスト教的な神学である。その意味で、社会経済や生活環境の進歩は、神学的な存在論や規範論（自然神学、社会イデオロギーとしての宗教倫理等々）に支えられている。飢餓に苦しむ時代、具体的で実践的な知（神学）の前で、ソクラテス的な批判学や反省学を課題にする人々は少なかったであろう。
- 明らかに、ペストや魔女狩りという社会的な危機が、神学的な存在論や規範論を否定する導火線となった。哲学を反省学として位置づけるのは、ドグマとしての存在論の危機からである。固定化され実践的な力を失った知を批判し、点検する作業として、反省学としての哲学は、時代的に社会的に必要であった。

近代科学の発展と現象学の役割

- カーテジアンの考えの中には、明証性は確立するのは主観的な世界であるという理解が存在している。神の意志によって動く自然の姿は、自然法則に従う現象として理解され、神学から自然科学が進化する。そして、実証可能な現象の確認、自然法則の発見によって、主観的な自己意識によって確立していた明証性は、機械的な強固な繰り返しの自然世界に対する解釈理論の実践的な有効性（技術力）によって置き換わる。明証性は現実的な理性であると解釈された。
- デカルトの主観的世界は自由意志を持つ世界である。しかし、自然的世界は神の意思に支配され、その規則性に従って存在している。その意味で、主観的世界に人間的な自由や創造性が付属しると解釈される。また、機械的な自然的世界は、もっとも忠実に神の意志を反映し、間違うことなくその規則性が反映されていると考えられた。神の証明のために、デカルトやガリレオは力学を研究した。
- 物理学は、客観的理性の所在を示す理論として、正確に宇宙や自然の運動（存在）を予言できる知として位置付けられ、発展してきた。また、力学を活用することで、産業は変化し、産業革命や資本主義生産様式が形成し発展した。その発展は、社会経済の制度を変え、文化を変え、人間の認識を変え、近代から現代までの人類社会の変化を導いた。
- 古典力学は、直接的な経験が科学観測の方法が用いられる。しかし、観察対象のスケールが感覚世界の認知能力を超えることによって、機器分析によって分子などミクロな世

界を観測が行われる。その測定は理論に基づくものある。物理や化学の理論的な解釈があり、その解釈に基づく自然現象を機器に機能で取り出し、観測するという間接的な測定観測がなされるのである。現代科学における観測問題については、すでに論理実証主義などの科学認識論で論及されている。

- 現象学も、科学技術が経済や社会の基本的な制度として確立した 19 世紀後半から 20 世紀にかけて登場する。しかし、現代科学や技術の認識論的課題は、現象学が指摘するように素朴実在論的世界観への批判ではない。むしろ、人間社会学こそが、現象学が指摘した素朴実在論、客観主義的な自然主義の傾向を持つと思われる。
- 科学的世界観は生活空間のすべてに広がり、その有効性（正しさ）を実践的な社会経済の進歩への奉仕として示した。科学技術の進歩によって生活環境は変化した。人類が今まで経験したことのない豊かさを手に入れた。と同時に、地球規模の環境破壊も生み出され、人類の死滅を導く破壊的な兵器も作ってしまった。科学技術文明に対する点検をしなければならない。再び、科学的知のあり方を根本的に問題にする哲学を必要としている。それは、科学主義への批判として展開されてきた。しかし、ここでも、批判が形而上学的な視点を持つことで、反科学と反科学主義との混乱が生じていた歴史があったことを考える必要がある。
- 総じて、認識論が問われる時代には、存在論の危機的な課題が常にある。科学的知という現代存在論が危機的な課題を抱えるとき、認識論は科学認識のあり方を課題にする。認識論の対象は存在論（科学理論）の点検である。
- 現象学は、反省学であり、認識論ではない。現象学は直感的な視点を人間学や社会学に提起する批判学であり、その人間社会の科学理論の基本を提起する理論である。しかし現象学は、社会現象の全体を解明する科学理論（存在論）の公理系を構築する認識論的な強度を保障してくれるだろうか。そして、最も現象学は必要とされているのは、現代の科学主義の時代である。その客観主義や自然科学主義を批判する基本的な視点を、現象学は提起してくれる。

臨床の知としての人間社会学と反省学や批判学の役割

- 現代物理学の観測問題から、素朴実在論を自然科学の認識の地平だと考える人はいない。その意味で、自然科学の中には単純な素朴実在論者はいない。
- 自然科学的知識が人間社会学に対して影響を与え続けているため、むしろ、社会現象を自然的な現象のように客観的に存在していると誤解している人がいることは否定できない。社会学も進化論、実証主義などの影響を受けながら形成された。心理学も実験心理学、動物行動学的な実験や脳神経生理学的な研究結果を前提にして論及されている。
- 統計学的な分析方法は、自然科学の実証的方法を社会学に取り入れたものである。この帰納法的な方法論は、フィールドワークでの社会調査方法で活用されている。統計的方法を用いて、集団の傾向は数量的に理解されるが、その中身の分析をするためには、別の方法が必要となる。つまり、分析の課題は文化的や歴史的な特殊性や構造性を知るこ

とである。統計的分析から集団の傾向が理解され、その傾向の意味を理解するためには、社会学的な理論が必要となる。

- 社会学的な理論は機能主義をはじめ色々な学説が提案され、その有効性を証明するための実証的な研究がなされてきた。
- 構造主義言語学や精神分析学が人間社会学に与えた影響は大きい。言語構造としての自我、行為、道具、規範、文化構造の解明が現代の社会学の中で試みられた。構造主義、機能主義、現象学、ポスト構造主義などに影響受けた人間社会学は、文化記号と集団表象や共同主観のあり方を研究している。
- 文化人類学、民俗学や生活学を含めて、これまで生活事象を生活用具から分析していた。それらの分野でも、新しい人間社会学の方法論が取り入れられようとしている。なぜなら、それらの科学は生活改善や文化改善の実践的課題と常に結びついおり、文化病理、社会病理、生活病理に対する臨床の知としての課題を持っているからである。
- 現象学的な直感は「対象世界から内的な自我の構想を理解し、自己意識や無意識の分析の中から生活世界の構造を理解する」という方法論を提起してきた。この問題提起は、認識することは生きることを変革することであり、認識を内的世界の外化と外的世界の内化として、理解することであった。現象学的な理解は科学的解釈ではなく実践的自己と世界の変革を課題にしているのである。
- もし、社会変革と自我変革を課題にする実践的な知のあり方、臨床の知として人間社会学を位置づけるなら、批判学や認識論ではなく、実践的で有効な科学理論が必要となる。その理論を課題したとき、現象学的な批判学を超えるための試みが、人間社会学の中でなされないだろうか。
- 現象学的な批判は、科学主義や客観主義にこもり、実践的な理論を提案できない人間社会学の点検のためになされたものである。

プログラム科学批判としての現象学

プログラムと記号

- 人工物プログラムとは言語のように構造化されていると考える。すると、これまで構造主義が語る文化生産物の構造を決定している文化記号もプログラムという概念で語ることが出来る。
- 記号とプログラムの違いは何か。記号に比べてプログラムはある決定された言語活動が時間的経過と共に設定されているというニュアンスを与える。記号はその生産物が示す意味を示すものである。それは文脈的な構造は持たない。つまり、記号はプログラムを作る言語の単位であるが、それらは文法的、文脈的に配列されており、単なる記号の集合でなく構造性を持っており、そして、時間的に記号の構造が流れ、ある文脈的な指示機能を持っているのである。
- 現象学的な視点からプログラムという新しい概念を考えるとき、参考となる研究がある。

原始時代の言語活動や意識構造を理解する手段として、チャン・ディク・タオが『言語と意識の起原』の中で展開する機能文の分析である。原始時代の道具の形態から言語活動の構成を理解するのである。

- プログラムという概念は、道具のもつ機能を言語的活動の流れ（ある目的を達成するための記号的なシステム）というニュアンスを与える。また、プログラムという用語は、道具そのものに付随しているものでなく、道具を活用する行為と結合して存在していることを示すものである。

プログラムと環境

- しかし、この言語構造として説明するプログラム概念は人間の行為の産物、つまり人工物にたいして活用できる概念である。自然を構成する生態系、生物系、化学系、物理系のプログラム（法則性）は含まれてはいない。人間社会学の学問領域や研究課題が人工物に限定される限り、言語系の規則性や構造をプログラム概念の基本とすることに問題はないのである。
- 地球規模で深刻化する環境問題一つを取っても、人間の行為の産物が地球規模の自然環境に変化を及ぼすのである。生物活動によって作られた大気成分や生態環境であると考えれば、当然のことだが、人間の行為の結果としての自然は精々風土や風景のレベルで理解されていた 20 世紀前半と違い、今や、生態環境でなく自然環境する人間的行為との関係を無視しては理解することができないのである。
- 自然科学の対象であった大気成分の課題は、自然科学と社会科学の境界領域である生態環境学の課題になる。人間の行為や社会経済のシステムと大気汚染物質の関係が調査され、大気汚染や温暖化ガスの与える大気中での化学反応や大気物理的な効果についての研究がなされ、生態系や人体への影響が分析される。もちろん、それは、大気汚染によって生じる経済的な影響や社会文化的な影響も課題になっており、大気汚染が深刻化し地球温暖化が進むことで生じる生態系の破壊やその経済効果について研究が展開していくのである。
- 工学、農学、医学等の今まで自然科学を土台として成立していた技術学は、社会工学、教育工学、等々。融合領域とか自由領域とかいった分野が生み出されている。社会学は現代社会の知のあり方を問題にすることになる。知の社会学を語るとき、それらの学際化していく科学文化現象の社会学的な理解が必要となる。
- 行為（労働）としての科学技術、行為（労働）の蓄積としての文化環境という用語と、実践的論理（解釈）としての科学理論、実践的論理（解釈）の蓄積としての学問体系という用語を一つにまとめるために、人工物プログラムという新語があると考えられる。この吉田民人の新語は、人工化されていない環境はほとんどない現在の異常に増殖した人類という一種の哺乳動物に支配された地球の姿を正確にそして反省的に理解するために必要な用語であるとも言える。
- プログラム科学として科学論が再編される科学史的な意味は、現象学が提起した科学批

判を受け継ぐことで、行為としての科学の新たな段階を社会学的に問題にすることを可能にしているのである。つまり、科学認識を生活世界と無関係に存在しているという自然主義的態度、科学理論が、主観的、文化的、歴史的意識と無関係に存在しているという理論主義的態度、そして科学観測、調査や測定が、純粋に客観的な行為であり行為主体の欲望や利害と無関係であると信じる意識主義的な態度、言い換えると自分が客観的なしまも真理の追求のための行為であると意識したい自分の科学行為の建て前を無条件に認める意識主義の態度、こうしたドグマを点検するために、科学理論を人工物（人が作った）プログラム（言語的な構成物）であると解釈したのである。

- 環境と呼ばれる現象世界を構成しているものは、単に認識の風景としての事象、記号化された存在形態だけでなく、その事象の背景となる世界、それに関連する世界によって構成されている。プログラムとは環境を構成するすべての記号とその記号間の関係を示そうとする欲張った便利な用語ではないだろうか。

生活世界の科学の現象学的点検

- プログラム科学の領域の一つの分野、生活世界のプログラム構成を例題にして、人工物プログラム科学論を理解するための演習問題を作ってみた。
- 生活世界の科学を理解するための科学認識論は、極めて現象学的である。生活世界から作られた自我や意識が科学観察の土台になり、科学観察や科学行為の意識が生活世界を見る意識となっているからである。そのことを自覚的に理解するためには、生活学への現象学的批判を前提にした科学認識論が必要である。
- 例えば、生活学の研究を例に取ってみる。生活環境を調査している研究者はその生活環境の中にいる。ほとんどの日本の生活学の研究者は日本人である。それらの人々が自分の意識や無意識、自我を作っている言語や表象、価値、美意識などが、研究の対象となっている生活世界の構造と同じパラダイム上に存在していると自覚することはない。
- 生活学調査の対象から導き出される科学的考察とか理論（生活学理論）があるとすれば、その理論の根拠を一応自覚しなければならない。その理論がその根拠である観測対象や観測主体の文化的歴史的な条件を無前提にし、出来上がった結論（理論）がそれとは無関係に歩き出すことによって、当然、アメリカの生活学を日本で応用しようと考えることが当然となる。また、同様に、日本の生活学の理論をアフリカで活用し、そのまま利用できると思う考えがうまれるのである。
- 殆どの、海外の経済援助、ODA などの反省から、開発政策の経済学などでは、すでにその問題に気付いている。そして実践的に解決の糸口を見つけている。
- 生活学だけでなく、すべての人間社会学の理論や科学性は文化的歴史的意識から独自に存在することはできない。科学が文化的産物であり、社会経済的要素をもって発展していることは、科学史や科学社会学の中で古くから指摘されたことである。生活学は、生活主体が生活環境の中で生み出され、その主体がその環境を課題にしているので、現象学的点検を語る上でも、もっとも理解しやすい構造を提案している。

- 批判的に点検するのは、比較学的な方法が導入されたときである。比較文化論、比較住環境論と比較学は文化空間の差異を生活用具や生活様式の中で浮き彫りにしてくれる。
- また、歴史的な比較学も可能である。その場合、現在の歴史的な解釈主体が認識の対象となるのである。無自覚に前提にされている現在の歴史解釈主体を歴史的な解釈の流れの中で対自化することが可能になる。

プログラム科学からみた生活資源論の解釈

生活資源の四脚構造の解釈

- 経験を無条件に前提とすることで、事象を構成している記号との構造
- 人工物の存在形態を資源と呼ぶことにする。資源の物質的な形態を素材と呼ぶことにする。また、資源の規範的な形態を様式と呼ぶ。
- 素材は木、紙、プラスチィク、鉄、陶器等々。資源を構成している化学的な物性を持つ素材である。その素材は化学的な素材の加工された形、色や付属品なども含まれている。人工物資源の素材は加工された物質的な存在である。
- また、生活主体を構成している生物体としての身体、脳神経細胞、免疫細胞などである。腸に共存し、消化を助け、栄養を生産する微生物を培養している腸内環境も、素材と考えられる。身体素材を内的な素材と呼ぶ。
- さらに、食材などの廃棄物を流した後、それを分解する生物や微生物の生態環境系を作り、水質の保全を行うためのため池や干潟を守るために作られた河川や海岸の建造物の素材、コンクリート、砂利や植林も素材である。これらの生活環境を作る素材を外的な素材と呼ぶ。
- 様式は、規範、規則、習慣、法律、貨幣の単位、国際法、条約、数学の決まり、計算法、物理法則、科学理論のような生活環境や社会経済のシステムや知的活動を維持するための規則がある。さらに、巧みの技、技能、技術、道具の使い方、言い方、歩き方、書き方、理論、考え方、モラル、価値、パターン認識、文法、記号解釈など生活主体を維持するための手段も様式である。前者を外的様式といい、後者を内的様式と呼ぶことにする。
- それらの素材と様式の不可分の組み合わせによって資源の存在形態が作られている。生きている自分を精神と肉体に分離できないように、生活世界の存在形態は素材と様式の分離として語ることはできないのである。

記号と意図、プログラムの解釈

- 生活資源の四脚構造を理解するために、生活世界の構成要素である素材と様式の二項分離と、内的世界と外的世界の二項分離の組み合わせ構造として生活資源の存在形態があることを説明しなければならない。今までの現象学的な認識論の展開の延長線上に、この生活資源の存在形態についての解釈は可能であると考えられる。
- 人工物や生活資源の素材は、単に物理的、化学的、生物的な素材ではなく、それが加工

された素材である。言い換えると、配置を置き換えられた砂利でも、山や川に転がっていた石ころではなく、「砂利」となったものである。素材は人間の行為、その意図や目的を満たすための空間的時間的なあり方を所有している。その意図や目的をプログラムと呼んでいるのである。

- 資源の概念には、記号論が見のがした存在に対する実在論的な解釈が素材として語られている。素材は素朴実在している存在形態ではなく、あるプログラムに基づいて存在しているものである。その素材を理解するためには、そこに含まれているプログラムを理解しなければならない。
- 資源論で語られる自然的な素材の解釈が、素朴実在論的な落とし所にはめられないために、プログラムという概念が用意されているのである。

存在論と認識論、プログラム科学の科学性

- 現象学的な社会科学の対象は、歴史的に間主観的な社会事象、集団表象的な行為であり、その理論の展開の有効性はミクロ（精神現象）とマクロ（文化現象）との統一的解釈理論を確立したことなどである。
- 精神病理、生活病理、文化病理、社会的危機、国際問題、エネルギー問題、南北問題、生態環境の危機等々の課題を統一的に問題にしなければならない。内的世界と外的世界の相互関係学である現象学から、自然学や環境学を含める領域まで科学が人間と社会の問題として解決しなければならない課題を問われているのである。
- 有効な知のあり方、現実に解決を求められている課題、その中で、現象学的な視点はどこまで実践的な知を提起してくれるのか。
- これまでの科学の有効性を問いかけるために試みた認識論の作業、反省学の作業から理解できた科学と哲学の地平を今、ここで、その不十分な理論的検証を前提にしながらも、現実の問題にかえさなければならないと考える。
- 現象学批判として提起された課題、ポスト現象学と勇ましいことを言った話も、現象学的な視点を前提にしている。
- 人工物プログラム科学という自由領域の科学性を提起するために、必要な哲学的な位置付けで、問題になることは、実在に対する解釈である。素朴実在論の批判と名目論への批判をプログラム概念の中で位置付ける作業が残る。

急いで書いたため誤字や脱字があります。

2003 年 12 月 6 日午前 11 時３０分